

平成 21 年 4 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2006～2009

課題番号：18252002

研究課題名（和文） 先端的な科学技術を視点としたイスラム問題の系譜的かつ広域的な研究と将来の展望

研究課題名（英文）

Historical and Regional Study on Current and Prospective Islamic Issues with Due Consideration to Scientific/Technological Perspective

研究代表者

北村 歳治 (KITAMURA, Toshiharu)

早稲田大学・国際情報通信研究科・教授

研究者番号：00329153

研究分野：国際金融論

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史 ・ 科学社会学・科学技術史

キーワード：イスラム、科学技術、IT、系譜研究、広域研究、同質化、多様化、社会

1. 研究計画の概要

本研究は、IT等の先端的な科学技術の利用がもたらす影響とその反作用等に注目してイスラム地域の分析を行い、今日のイスラム問題の展望を試みることを目的とする。そこで、1)イスラム世界が支えていた科学技術や情報交流の系譜を辿る、2)先端科学の進展が引き起こす生活様式同質化と多様化を社会・経済・文化問題の基層の動向から探る、という2点を研究の主軸にする。具体的には、1)では文献史学と物質文化研究との総合的な立場から、イスラムの技術革新の史的展開を考察し、2)では日本サイドにおいて既に根付いてしまっている諸前提の検証、現地の調査、現地研究者との情報交換と討議等を通しての動向分析を初年度からの3年間に亘って行い、4年目に3年間の調査成果を総合する。

2. 研究の進捗状況

1)の系譜研究に関しては、中世に達成されたイスラムの技術革新のうち、特に農業分野における砂糖の精糖技術と窯業分野におけるイスラム三彩陶成立の研究が進んでいる。さらに国内のシンポジウムを通しては、初期イスラム時代の貨幣発行に関わる技術的側面や中世におけるイスラム圏の天文学発展の歴史的な経緯等が論じられた。2)の広域研究に関しては、インドネシア大学(2006)、カイロ大学(2007)、マラヤ大学(2008)においてワークショップが開催され、毎年の中東あるいはアジアのイスラム圏に日本側から研究メンバー数名を派遣して、現地で活発な意見交換を行なう試みが続けられている。この会では、金融・経済、教育、文

化、技術等の多角的な分野において、イスラム社会の変貌の現況を現地研究者と論じることを通じて、その動向が把握することにある。討議を通じて、グローバルな一様化が進む面と共に、先端技術の活用を通じて、地域に固有な価値観や経済活動が活発化している側面も明らかになってきている。また、国内のシンポジウムを通じては、中東、中央アジア、東南アジアにおける地域的なイスラムの歴史的展開をベースにして、イスラム的・知をいかに広く発進していくか等の問題が討議された。その他に、研究分担者・協力者による個別研究では、中東のイスラム問題の中でも経済・社会に大きな影響を与えている湾岸地域情勢やシーア派情勢に関する分析が進み、またアジアのイスラム圏においては、ジェンダー論の新しい動きや女性の進路形成に関する最新の教育問題が論じられた。国内におけるイスラム圏の動向分析においては、科学技術と社会の民主化の関わりやテロリズムとの関わりなどに関する研究も進んだ。この他にも、中東や中央アジア等の現地研究者からは、先端技術がいかに地域社会を変貌させているか、また先端技術による社会変化をいかにイメージしているか等の論考も寄せられた。

3. 現在までの達成度

<おおむね順調に進展している>

1)系譜研究は、特に農業分野と窯業分野で、研究手法としては文献学と考古学を主体とした研究成果がまとまってきている。今後は、研究対象に、さらに科学分析技術の応用していくことを課題とする。2)広域研究は、中東、中央アジア、東南アジア等のイスラム圏

の動向が特に金融・経済、社会、教育等の領域を中心にした分析が進んだ。今後は、さらに現地研究機関との密接な連携を生かし、地域的な問題を掘り下げていくことを課題とする。

4. 今後の研究の推進方策

2009年度は、本研究の4年次目にあたることから、個別研究を継続すると共に、本年度は各分野において、研究成果のまとめが課題となる。1)系譜研究は、農業分野と窯業分野での従来の研究を継続すると共に、研究成果に関して幅広い意見交換を行ない、精糖技術の展開とイスラム三彩形成の道筋に関する総合を行なう。2)広域研究は、本年度はトルコのボアジチ大学歴史学科において、ワークショップが開催されることが決まっている(2010年3月)。ここでは、日本側の研究班は、本科学研究の3年にわたり、中東、東南アジア、中央アジアにおいて行なってきた動向研究に関する総括的な報告を行い、その成果をもとに、トルコの研究者と意見交換を行なう。また研究分担者と研究協力者による個別の研究は、いずれの分野でも分析を継続し、かつそのとりまとめを行なう。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

保坂 修司「真珠の海：石油以前のペルシア湾」『イスラム科学研究』早稲田大学イスラム科学研究所、vol.4、2008、1-42(査読有)

桜井 啓子「パキスタン：シーア派宗教学院(マドラサ)の統計」『イスラム科学研究』早稲田大学イスラム科学研究所、vol.3、2007、99-103(査読有)

長谷川 奏「エジプトにおける古代世界の変貌 イスラム文明形成に至る生活文化の移相」『比較文明』比較文明学会、vol.24、48-64(査読有)

[図書](計2件)

北村 歳治・吉田 悦章『現代のイスラム金融』日経BP社、2008、1-253

佐藤 次高『砂糖のイスラム生活史』岩波書店、2008、1-241

[その他](計1件)

北村歳治、長谷川奏「第8回 シンポジウム・イスラムとIT - イスラム世界の経済と教育 - 」

1. はじめに

2. 主催者挨拶

3. 津村 眞輝子「初期イスラム時代の貨

幣制度 - コインが語る伝統の継承と改革 - 」

4. 湯川 武「イブン・ハルドゥーンの世界論 - 労働・富・所得を中心に - 」

5. アジーザ・バハルディーン、保坂 修司、鴨川明子「ディスカッション・フォーラム：イスラム世界の経済と教育」

『イスラム科学研究』早稲田大学イスラム科学研究所、vol.5、2009、181-232

樣式 C-7-2

自己評価報告書